

### 期中の評価個表

事業名	水源林造成事業	事業計画期間	S36～H95（最長120年間）
事業実施地区名	ちくごわこういきりゆういき 筑後川広域流域 50年以上経過分	事業実施主体	独立行政法人森林総合研究所

事業の概要・目的	<p>筑後川広域流域は、有数の林業地である日田地方や日田林業の流れをくみ「サシスギ」で知られる八女林業地帯を形成するとともに、有数の穀倉地帯である筑紫平野、また、河口部には福岡市を中心とした福岡都市圏が広がっている。しかし、過去には、平成3年9月27日に発生した台風19号（大分県西部の森林を中心に、風倒、折損木等の被害が多発し、大分県内で22,000haを超える未曾有の森林被害をもたらした）のような自然災害も発生しているほか、近年では、シカ森林被害の拡大も問題となっており、事業の実行に当たっては、シカ害防除を図りつつ計画的な造林を図ることが重要となっている。当事業は、温暖で降水量が多い当該流域内の福岡県久留米市外11市町の民間による造林が困難な奥地水源地域において水源を涵養するため、独立行政法人森林総合研究所が分収造林契約の当事者となって、急速かつ計画的に森林の造成を行うことを目的としている。</p> <p>具体的には、水源かん養保安林及び同予定地のうち、無立木地、散生地、粗悪林相地等において、独立行政法人森林総合研究所が費用負担者となって造林地所有者及び造林者と分収造林契約を締結し、新植・下刈・除伐・保育間伐など森林整備のための費用負担及び健全な森林の育成に向け、造林者に対し事業実行に関する技術指導を行い、水源林を造成するものである。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・主な事業内容：契約件数 68件、事業対象区域面積 1,109ha</li> <li>・総事業費：4,634,760千円</li> </ul>																
① 費用対効果分析の算定基礎となった要因の変化等	<p>当事業の費用対効果分析における主な効果は、水源涵養便益であり、これは植栽や保育により森林を造成し、洪水防止、流域貯水、水質浄化に寄与する効果である。また、山地保全便益については、森林を造成し土砂流出や山腹崩壊等の防止に寄与する効果である。</p> <p>現時点における50年経過分の造林地の費用対効果分析の結果は以下のとおりである。</p> <table border="0" style="margin-left: 40px;"> <tr> <td>総便益 (B)</td> <td>18,899,891千円</td> </tr> <tr> <td>総費用 (C)</td> <td>10,105,013千円</td> </tr> <tr> <td>分析結果 (B/C)</td> <td>1.87</td> </tr> </table>	総便益 (B)	18,899,891千円	総費用 (C)	10,105,013千円	分析結果 (B/C)	1.87										
総便益 (B)	18,899,891千円																
総費用 (C)	10,105,013千円																
分析結果 (B/C)	1.87																
② 森林・林業情勢、農山漁村の状況その他の社会経済情勢の変化	<p>当該流域が属する福岡県、佐賀県及び大分県における民有林の未立木地面積は、昭和45年の53,017haから一貫して減少傾向にあるが、平成24年においては34,591haであり、引き続き森林造成が必要である。</p> <p>また、これらの県における私有林の不在村者所有森林面積は、昭和45年の61,161haから平成17年の134,858haと増加傾向にあり、林業就業者は、昭和45年の5,126人から平成22年の3,437人と減少し、平成22年の65歳以上の割合は17%と高齢化も進行している。さらに、木材生産額は、昭和46年の50,818百万円から平成22年の11,520百万円と減少している。これらのことから、地域の森林の管理水準の低下が危惧される。</p> <p>こうした中、水源林造成事業については、水源涵養機能等の向上を図りながら、その実施を通じ、地域の雇用にも貢献してきたところであり、事業地が主伐期を迎える中、今後は、地域の木材供給に貢献できるよう取り組むこととしている。</p>																
③ 事業の進捗状況	<p>50年経過分の造林地の樹種の面積割合は、スギが約41%、ヒノキが約52%、アカマツ・クロマツが約0.1%、一部干害やシカ害等によりシイ、カシが成長して広葉樹林化した区域は約7%となっている。</p> <p>植栽木の生育状況<sup>(注1)</sup>は、以下のとおりで、3～5等地に相当する生育となっており、概ね順調な生育状況である。</p> <table border="0" style="margin-left: 40px;"> <thead> <tr> <th></th> <th>樹高</th> <th>胸高直径</th> <th>1ha当たり材積</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>スギ (47年生)</td> <td>17m</td> <td>22cm</td> <td>440m<sup>3</sup></td> </tr> <tr> <td>ヒノキ (46年生)</td> <td>15m</td> <td>21cm</td> <td>330m<sup>3</sup></td> </tr> <tr> <td>アカマツ・クロマツ (39年生)</td> <td>13m</td> <td>20cm</td> <td>131m<sup>3</sup></td> </tr> </tbody> </table> <p>(注1) 林齢別の生育状況を林齢別面積で加重平均したもの。</p>		樹高	胸高直径	1ha当たり材積	スギ (47年生)	17m	22cm	440m <sup>3</sup>	ヒノキ (46年生)	15m	21cm	330m <sup>3</sup>	アカマツ・クロマツ (39年生)	13m	20cm	131m <sup>3</sup>
	樹高	胸高直径	1ha当たり材積														
スギ (47年生)	17m	22cm	440m <sup>3</sup>														
ヒノキ (46年生)	15m	21cm	330m <sup>3</sup>														
アカマツ・クロマツ (39年生)	13m	20cm	131m <sup>3</sup>														

④ 関連事業の整備状況	<p>当該流域が属する福岡県、佐賀県及び大分県では、以下のとおり森林整備を進めることとしている。</p> <p>【福岡県：福岡県森林・林業基本計画（平成25年3月）】 「森林の世代サイクルを回復」、「経営感覚に優れた担い手を育成」、「森林の持つ公益的機能を計画的に保全」</p> <p>【佐賀県：・佐賀県総合計画2011（平成23年10月）】 「針広混交林化などの健全で多様な森林づくりの推進」、「森林の公益的機能の維持・向上」、「荒廃した山地の早期復旧・整備による災害の未然防止」、「林内路網の計画的な整備を推進し、森林整備の効率的な推進」</p> <p>【大分県：第5次大分県緑化基本計画（平成25年3月）】 「指定された保安林の適正な施業の指導を強化し、保安林機能の資質向上を図る」、「自然条件や地域特性に応じた、長伐期施業、複層林化、広葉樹林化など多様な森林づくりを推進」</p> <p>こうした中で水源林造成事業地では、関係県の森林・林業施策との連携を図りつつ、多様な森林整備、間伐や路網整備を通じ、流域内のダム水源や簡易水道水源などとしての水源涵養機能等の発揮に一定の役割を果たしている。</p>
⑤ 地元（受益者、地方公共団体等）の意向	<p>植栽地は順調に成林しており、所在市町及び契約相手方（造林地所有者、造林者）は水源涵養等の機能発揮への期待が大きく、引き続き適期の保育作業の実施を要望している。</p>
⑥ 事業コスト縮減等の可能性	<p>費用対効果分析の結果から効率性は確保されているが、さらに、植栽後、干害等によって広葉樹林化した一部の林分については、天然広葉樹の育成を図りながら針広混交林等への誘導を積極的に図ることとしている。</p> <p>また、間伐の実施に当たっては、契約相手方（造林地所有者、造林者）の理解を得るなかで間伐木の選木及び間伐手法を工夫（列状間伐や間伐率を最大限に適用した強度な間伐等）することによりコスト縮減に努めることとしている。</p>
⑦ 代替案の実現可能性	<p>該当なし。</p>
第三者委員会の意見	<p>費用対効果分析結果、森林・林業情勢、植栽木等の生育状況、事業コスト縮減の取組等、事業の公益性を総合的に検討した結果、水源林としての機能を十分発揮していることから、事業を継続することが適当と考える。</p>
評価結果（案）及び事業の実施方針	<ul style="list-style-type: none"> <li>・必要性： 本事業は、奥地水源地域において、水源涵養機能等の発揮の観点から、森林所有者の主体性に任せては、森林の造成、整備が進まないおそれがある箇所を実施するものである。 当該地は、温暖で降水量が多い本流域の奥地条件不利地域等において、健全な森林の育成に向けた取り組みが計画的に行われていることから、引き続き水源林造成事業による事業の必要性が認められる。</li> <li>・効率性： 費用対効果分析結果の他、植栽後、干害等によって、広葉樹林化した一部の林分については、天然広葉樹の育成に重点をおいた施業へ変更するなど事業の実施に当たりコスト縮減に努めており、また、間伐の実施に当たっては、契約相手方（造林地所有者、造林者）の理解を得るなかで間伐木の選木及び間伐手法を工夫（列状間伐や間伐率を最大限に適用した強度な間伐等）することによりコスト縮減に努めているなど事業の効率性が認められる。</li> <li>・有効性： 植栽木は順調な生育を示しており、水源涵養などの水土保全機能を着実に発揮している上、地域雇用への貢献や木材供給といった効果もあり、事業の有効性が認められる。</li> </ul> <p>事業の実施方針： 継続が妥当。</p>

様式1

便 益 集 計 表  
(森林整備事業)

事業名：水源林造成事業

施行箇所：筑後川広域流域 50年経過契約地

(単位:千円)

大 区 分	中 区 分	評価額	備 考
水源涵養 <sup>かん</sup> 便益	洪水防止便益	5,292,024	
	流域貯水便益	1,682,404	
	水質浄化便益	4,307,798	
山地保全便益	土砂流出防止便益	5,852,719	
	土砂崩壊防止便益	88,776	
環境保全便益	炭素固定便益	1,519,905	
木材生産等便益	木材生産確保・増進便益	156,265	
総 便 益 (B)		18,899,891	
総 費 用 (C)		10,105,013	千円
費用便益比	$B \div C = \frac{18,899,891}{10,105,013}$		= 1.87

